

故郷の「雨」と共生する

学校法人池田学園池田中学校

二年 河野 文香

「一カ月に三十五日雨が降る。」

屋久島の雨を体験した「浮雲」の作者、林美美子が著した言葉です。私が育った屋久島で、その言葉を実感しない人はいないと思います。

屋久島は周囲約一三〇キロの中に九州最高峰の宮之浦岳をはじめとして一八〇〇メートルを越える山々が連なる黒潮の中に浮かぶ島です。その地形から黒潮の海から生まれる水蒸気を集めて、積乱雲に変え大雨を降らすという、水の循環を目の当たりにすることができます。そのような環境の島で私は育ちました。

屋久島の電気は水力発電です。私は、発電施設を見学に行ったことがあります。見学後、家に帰って電気をつけたときには、これが水の力かと感動しました。

屋久島の雨の降り方には、独特なものがあります。同じ島の中でもわずか五分くらい走れば雨がやんでいたりします。屋久島には、トンネルは十メートルくらいのものが一つしかありませんが、「トンネルを抜ければ晴れた。」という表現もあります。また、四月から五月に降る長雨のことを、新緑を洗い流すように降ることから、「木の芽流し」という風に表現します。

また、屋久島には、霧雨のような雨は少なく、かさが役に立たないほどの「バケツをひっくり返したような」という表現がびつたりの雨が降ります。

大粒の雨で、体にあたると痛いと感じるほどの雨で、道路にぶつかり、はねあがる雨粒でぬれてしまいます。こういった雨が降ったときには、「雨が横から降る」とか「下から降る」といった表現をし、屋久島の人々は、雨について細かい表現をして雨に深い関心をよせることで、雨を生活の一部として考えているのだと思います。

台風の通り道でもある屋久島では、水不足や、渇水というのはほとんど縁のない

ことです。しかし、屋久島の人々は、けっして水を無駄に使ったり、汚したりということはありません。水の島屋久島だからこそ、普段の生活の中で、きれいな水を求めています。

屋久島の川の水は、普通に飲むことができます。私は今まで、日本に流れる全ての川の水も、飲むものだと思ってきました。しかし、日本においては、川の水は飲めない方が多いということを最近になって知りました。屋久島のように、飲む水の川が増えてくれるとよいと思います。

今はコンビニなどで水を販売したりしていますが、私にはそれも信じられないことです。なんだかもつたいない気になります。屋久島の水道水は売っているような水に負けないくらい、とてもおいしいです。

屋久島では、「水が森を育み、森が海をつくる」というテーマで、水の循環をもとに、漁師が植林を行い、森のダムづくりに貢献するなどの取り組みが行われています。このような取り組みも、雨が多く、豊かな自然のある屋久島に住む人々に、今日の自然を未来に残そうという思いがあるからこそ、行われているのだと思います。

夏休みには、毎日のように、川に行き、澄んだ水の中にいる、魚たちを追いかけて遊びます。川が毎日澄んでいるのも、雨のおかげだと思います。

そんな、きれいな環境を未来に残すためにも、これからも、水を大切に、生活していきたいと思えます。